

ESD 研修旅行報告

広島大学教育学部 原田 歩

今回のESD研修旅行ではオランダ・ドイツで研修を行った。テーマは環境・平和である。私が、この研修旅行に参加した目的は、持続可能な社会とはどのような社会であるのか、それ教育の文脈で語るときにどういった工夫・方法が取れるのか考える材料にしたいと思ったからである。私自身、ESDについて具体的に学んだのは、広島大学ユネスコクラブに参加してからである。クラブ内での学習のなかでESDの存在を知り、もっと深く知り学びたいと考えていた。

今回は、前述の通り環境と平和の2点の視点から研修を行った。「環境」については、オランダ自然史博物館や風車博物館、リーム地区などが挙げられる。「平和」については、アンネフランクの家、ナチ党大会跡地、ダッハウ強制収容所跡が該当する。

オランダ自然史博物館では、人類が自然の大きな枠組みの中で生活していること、人ではなくヒトとしての周囲と相互に作用しながら生きていることを膨大な数の資料から実感させられた。また、それらの内容を体験型のアイテムを通して伝えようとしているのが興味深かった。子供の関心が薄い中身を体験を通じて興味を引き、学ばせるという展示が行われている。日本でこれほどの規模で行っている場所はなかなかないのではないかと思った。風車博物館は、オランダ人の自然と共生しようとする中で生じた工夫が多く見て取れた、風を動力に取り込み多くの作業の動力とする。一つの風車の中で生活、仕事が同時に行われているのが印象的であった。リーム地区では、都市の再開発の際に過疎や交通、自然との共生などの多くのテーマを盛り込んだ都市であった。人が循環し、自動車が街中を走らず、生活のすぐ近くに自然と触れ合う場所が存在するとうように、その解決に努力された部分が良く見えた。とても面白い街であった。

アンネフランクの家は、第二次世界大戦中の生活の中で、苦労を重ねながらもその中で必死に生きようとするアンネの姿に心打たれた。小さな紙にびっしりと書かれた日記や、好きな女優の写真をとこと狭しと貼った壁を見て、彼女は戦中においても希望・意志をはっきりと持ち生活していたのだと分かった。ナチ党大会跡地は、ドイツ国民とナチ党がどのように戦争に向かっていったのかについて追体験的に学べた。教育とナチ政策の展示もあり、当時のドイツの子どもがユダヤ人に対して偏見を持っていたことが分かる落書きや絵、またナチの考えを植え付ける教科書などが見られた。教育の持つ力、恐ろしさを身に染みて学ぶ場所となった。最終日に訪れたダッハウ強制収容所跡は強制収容所での過酷な生活を知り、どうしてこのようなことが出来たのだろうかと考えさせられた。悲惨な写真が多くあり、見るのも苦しい場所であった。

今回の研修で、環境・平和が持続可能な社会の実現と深く関わっていることが実感できた。持続可能な社会を実現するうえで、私たちを取り巻いている環境と共存していかななくてはならない。共存とは今ある生活を諦めるのではなく、今ある生活の中に環境的視点から考えられることを入れ、我々の生活と環境が相互に利益を得られる様な方策を考えることが重要ではないかと考えた。それらを子供に伝える上で重要なことは体験的に学ばせることが大事であるとオランダ自然史

博物館で楽しそうに体験している姿をみて学んだ。平和については、直接見聞きすることの重要性を学んだ。第二次世界大戦のドイツの歴史やアンネフランクについては学んできたつもりだったが、現地にいて写真や当時の資料を実際に見て学ぶと印象が大きく違い、それまでの自分の認識の甘さに気づかされた。なので、ESD の授業の中にも直接体験が出来るような中身を入れたらどうであろうかと考えた。

また、今回の研修で現職の先生方とお話する機会が多くあり、とても貴重なお話を聞かせていただいた。学校の様子や教職に対する考え方、また ESD についての考え方についても囲炉裏お話を伺うことが出来、とてもいい体験になった。私自身、まだ教育実習等も行っておらず。授業開発についてもあまりイメージがつかなかったのだが、この研修な中身を使った授業を見て、少しそのイメージもつかめるようになった。

今後私は、広島大学ユネスコクラブの活動を中心にして、ESD について考えていきたい。最終的にはどのような授業が考えられるのかや、実際に授業をするならなどと考えられるようにになりたい。さらに、今回の研修の中にも ESD の授業で使える教材となる事例が多くあったと思うが、普段の生活の中でも何か教材になる事例はないか考えながら生活していきたい。



↑ オランダ自然史博物館



←

左) 風車博物館

右) アンネフランクの家



↑ ナチ党大会跡等

←

左) リーム地区

右) ダッハウ強制収容所跡